

注意!

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。
■文中で旧 URL(<http://www.nougyou.kitakami.iwate.jp/agri/>) を記載している場合、新 URL(<http://i-agri.net>) に読み替えてください。

平成16年 1月発行

病害虫防除技術情報 No. 15-4

岩手県病害虫防除所

ねぎの薬剤防除におけるさび病の両側散布の有効性

- ① ねぎの薬剤散布時に、畦の両側から丁寧に散布すると散布ムラがなくなり、葉の全面がしっかり濡れるので、十分な防除効果を得ることができる。
- ② 両側散布によって伝染源を残すことがなくなり、以後の発生を遅らせることができるので、薬剤散布回数を低減することができる。

◇近年のさび病の発生状況と薬剤防除の状況

- ・病害虫防除所の巡回調査圃場では、さび病の発生圃場が近年多くみられ(図1)、さび病に効果の高い薬剤散布回数が年間で平均2.0回(H13年)→3.0回(H15)と増えているにもかかわらず、十分に防除できないとする農家が多い。
- ・発生が多くみられる圃場では、薬剤散布を行う場合、ねぎの上部からのみ複数回薬剤液を散布している事例が多くみられる。(図2、3)

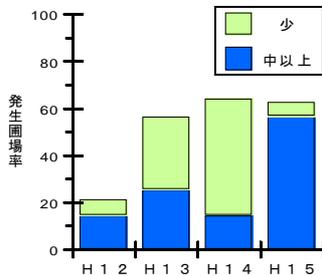


図1 年次別発生圃場率(9月前半)

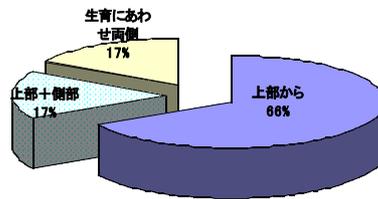


図2 散布の方向(巡回調査農家)

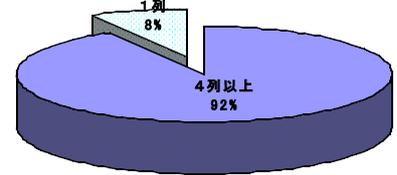


図3 1往復の散布畦数(巡回調査農家)

◇散布方向による防除効果

- ・さび病発生圃場で、8月13日にさび病に効果の高い薬剤(アミスター20フロアブル)に展着剤(ミックスパワー)を加用して300・/10aを目安に散布方向を変えて薬剤防除を行い、その時の濡れの状況を調査した後、防除効果(発病度)を調査した。

①防除効果

両側から丁寧に散布することによって高い防除効果が得られる。しかし、上側からの散布では防除効果が低かった。また、片側からの散布では、散布した側(散布面)では防除効果は見られるものの、散布しなかった側(裏面)では上側散布のと同様、低い防除効果であった。さらに、両側散布では伝染源を残すことなく防除できるので、以後の発生を遅らせることができる。

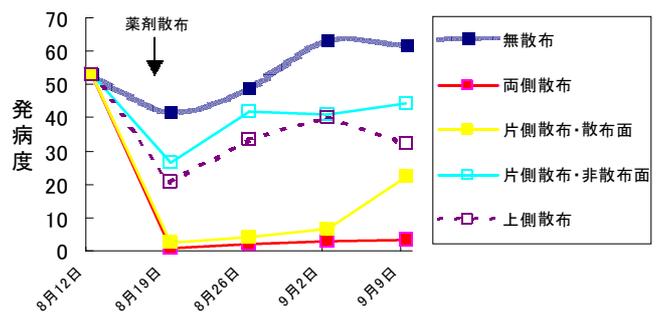


図4 散布方向によるさび病の発生推移

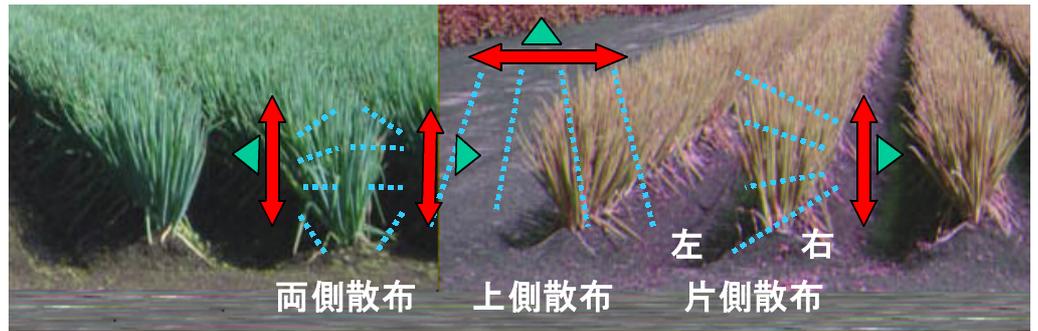


表1 散布方向による葉の濡れ程度とさび病の防除効果(発病度)

調査時期	散布方向による サイド別葉面の 濡れ程度	無防除	両側散布		上側散布		片側散布	
		—	右	左	右	左	右(裏面)	左(散布面)
薬剤散布0週目(8/13)		53.0	+	+	±	±	—	+
1週目(8/19)		41.7	0.9	0.9	18.3	23.3	26.7	2.5
2週目(8/26)		48.3	1.7	3.3	30.0	36.7	31.7	4.2
3週目(9/2)		63.3	3.4	2.5	41.7	38.3	40.9	6.7
4週目(9/9)		61.7	4.2	2.5	38.3	36.7	44.2	22.5

②散布方向による濡れ状況の差

両側から丁寧に散布した場合、地際部までしっかり濡れている。これに対し、上側から散布した場合は、葉の上位部分は濡れるが、地際部が十分に濡れない。上側散布では散布液量を増やしても筋状に流れるだけで全体が濡れることは無かった(図4)。片側から散布した場合は、散布面では濡れているが、非散布面では全く濡れが見られなかった(図5)。また、展着剤を加用しないと濡れ程度は著しく低下するので、薬剤の効果を十分に得るために展着剤は必ず加用する。但し、薬害事例のある混用組み合わせもあるので注意する。

散布液に食紅を加え、ねぎの着色程度で濡れ状況を判断した。



図5 上側散布における地際部の散布ムラと薬液のたれ



図6 片側散布での散布面と非散布面の濡れの状況